

内田久雄先生を悼む



東京大学大学院理学系研究科長
山本 正幸
(第13期日本分子生物学会長)

日本分子生物学会第3期・第4期(1983～1987)の会長を務められた内田久雄先生は、本年7月2日にご逝去されました。享年81歳でした。ここに謹んで哀悼の意を表します。

内田先生は戦時中に東京帝国大学に入学し、1947年9月に理学部化学科を卒業されて、国立予防衛生研究所に勤務されました。1954年に東京大学伝染病研究所(現医科学研究所)の助手となられ、当時米国・英国を中心に興隆しつつあった分子生物学にいち早く興味を持たれて1957年にカリフォルニア大学バークレイ校に留学されました。米国とドイツで計4年間分子生物学を吸収され、1961年に帰国された後は、文字通り我が国の分子生物学のフロントランナーとして分野を牽引してこられました。1963年に助教授、1970年に教授に昇任されています。

先生が帰国された当時、我が国で分子生物学を志す人々にまとまった研究・教育の場はなく、様々な学部や研究所に分散して居候をしているような状況でした。そのような状況の中で、内田先生は富澤純一先生や小関治男先生とともに、ファージ講習会を開いて分子生物学の啓蒙に努められました。さらに、分子生物学研究者の研究交流の場を確保するために、先生より一まわり年長で後に初代の日本分子生物学会長となられる渡辺格先生、ほぼ同世代で後に学会長を務められる高浪満先生、関口陸夫先生、三浦謹一郎先生たち、そして惜しくも早世された岡崎令治先生らとともに「分子生物学シンポジウム」を発案され、1970年より毎年八王子セミナーハウスなどで集会がもたれました。八王子で開催するときは内田先生が幹事役で、当時大学院生であった私を含めて研究室あげてお手伝いをいたしました。シンポジウムには当時海外から帰国して研究室を構え始めた30代の気鋭の研究者も加わって、熱気に富んだものでした。この分子生物学シンポジウムで啓発された若い人々が、その後我が国の分子生物学を支える中心として育っていきました。

分子生物学シンポジウムは発展的に解消し、1978年に日本分子生物学会が設立されました。渡辺先生が第1期・第2期の会長で、内田先生はその間庶務幹事を務められました。当初600人でスタートした学会は分子生物学シンポジウムから引き継いだアットホームな雰囲気を保っていました。年会は毎年12月に設定されましたが、この決定には、他の学会で発表した内容を再度発表することを禁止する学会もあったため、年の一番後に開くことで、分子生物学会では再発表でも何でも好きに発表してよいというメッセージが込められていました。また、学会の発表者は学生でも背広にネクタイというのが常識だった時代に、分子生物学会には普段着で参加できるというイメージが定着しました。分子生物学会が右肩上がりに大きくなっていったことの主因が、生物・生命現象を論理的に理解する強力な学問として旧来の生物学、医学の諸分野に急速に浸透していった分子生物学の学問性そのものにあることは疑うべくもありませんが、こと我が国の学会の帰趨については、渡辺先生や内田先生をはじめとする創設者たちが築き上げた、学問の議論には身分や形式は関係ないという自由闊達な雰囲気が、若者を引きつける魅力となってきたことも間違いのないでしょう。

いっぽう分子生物学における大きな技術革新として、遺伝子組換え技法が70年代後半に台頭しました。この技術の運用にはきちんとしたガイドラインが必要だということが研究者の間で合意され、米国を先頭に、様々な国がガイドライン制定に取り組みました。内田先生は早期に我が国のガイドラインを制定して研究推進を図ることが決定的に重要だとお考えになり、飯野徹雄先生たちとともに、1979年に総理大臣決定されることとなる「組換えDNA実験指針」の草案作成に大変ご尽力されました。

内田先生は1994年に日本学術会議の会員となられ、2000年まで二期6年を務められました。先生は分子生物学研連委員長に加え、さらに広範な生物学をカバーする生物科学研連の委員長も務められ、「分子レベルの構造生物学の推進に向けて」などの重要な報告をとりまとめておられます。先生の長年のご功績に対しては、1988年に紫綬褒章が贈られ、1996年には旭日中綬賞が叙勲されました。先生は学術会議を退職なさる頃に病を得られ、その後公の場から退かれてしまったのはまことに残念なことでした。

私が在籍した1970年代の内田先生の研究室では、DNA複製を中心に置きつつ、転写、翻訳、フェージの形態形成まで、様々な研究テーマが混在していました。先生は、まだ個人でなんとか目が行き届いた当時の分子生物学全体に興味を持ち、その該博な知識と理解力で弟子たちの相手をして下さいました。このような研究スタイルは、我が国でも岡崎先生や富澤先生が取られたような、問題に集中して最先端を切り開くタイプとは異なるものでしたが、そこで学んだ者たちには無意識のうちに大きな何かが植え付けられていたようです。先生の指導下で博士号を取ったのは10人余りと、そう多数ではありませんが、そのほとんどが大学や国立研究所で教授、准教授の職に就きました。そしていまや先生の孫弟子やひ孫弟子たちが、もはやそうした系譜を意識することもなく、活発に活動を始めています。

私が2003年に第13期の日本分子生物学会会長となったときの初仕事が米子で開かれた春季シンポジウムでのご挨拶でした。そこでは、分子生物学会が若い活力のある学会であることの例証として、歴代の会長の先生が全員健在でいらっしゃるということを申し上げました。今年になって、私たちは初代の渡辺先生、二代の内田先生を相次いで失うこととなってしまいました。それは、極めて高いエネルギーを持った火の玉が爆発し、新しいコンセプトや新しい技術が次々と形成されていった分子生物学の黎明期が再び返ってはこないということを改めて私たちに告げているかのようです。懐古でサイエンスが前進するわけではありません。しかしあの火の玉に比べると、研究条件は格段に改善されたはずの今日において研究推進策といわれるものが自ら発する光のなんと乏しいことでしょうか。何かというと目的志向型のプロジェクトへと傾倒する今日、生命を本当に理解するためには何をなすべきなのか、次の時代への突破口はどこにあるのか、若い皆さんにはぜひ真剣に考えて頂きたいと思います。30年でサイズは25倍に膨れありましたが、分子生物学会の基盤である自由闊達さは歴代執行部によって守られてきました。分子生物学会は昔も今もそこに所属することによってほとんど何の利権も生じない学会です。内田久雄先生のご逝去を機に、自己の意志で研究を行う自由こそが内田先生や渡辺先生が私たちに遺されたものであり、次の時代のサイエンスを切り開くためのよりどころとして私たちが守っていくべきものであるという思いを新たにいたします。